

「そろそろ見所の小雀を再開したら」という温かい励ましを受けて、ほぼ3年半ぶりに書くことにしました。毎回ながら私の浅学、非才に加えて粗相の多い駄文で恐縮ですが、「こんなことを感じる人もいるんだ」と言う位の軽いお気持ちでお付き合い願えたら幸いです。

今年の6月、私は奇しくも3日間連続で国立能楽堂にて『融』を観能しました。シテは坂井音重、友枝昭世、浅見真州といずれも当代一流の能楽師で、各自が表現、装束、面などはもとより他の演者、囃子など全体に拘って熟演。能楽ファンにとっては大変贅沢な三日間で堪能しました。

その中で私の関心を引いたのはワキ。1日目と3日目は宝生欣哉、2日目は宝生閑でした。宝生閑さんは言わずと知れた人間国宝で、彼が舞台に入ってくるだけでも舞台の緊張、能のレベルがぐっと上がる経験を私は何度かしました。そして忘れられない感動的な名演もいくつもあります。ある時の『鉢木』では、投宿を一旦断られて雪の道を引き返す場面で、彼の歩み、後姿から鉛色の空、雪深い山道が映像のように私に見えて、名人というのは凄い！と感嘆したこともあります。

しかし、今回は揚幕から力のない足取り、名宣の声もか細く、顔色は蒼白で、誰もが体調の悪さを感じる有様でした。それでもきっちり演じ切られて退場されましたが、終わった後の見所では「今日の宝生閑さんは…」と案じる声が聞こえました。

正直、その時私は能楽師には定年がなくてお気の毒だなあ、ある時点まできたら舞台を引退することは出来ないのかしらと思って帰宅しました。

それから1ヵ月位経った頃、偶然 NHK の E テレで宝生閑さんのドキュメンタリー「耐えて、なぐさめる」を見ました(30分番組 8月4日にも再放送)。

これによると今年5月81歳になられた閑さんは2年前、癌のために食道と胃の一部を切除され、お見かけも一時に比べぐんと痩せられただけでなく、声も出しにくくなられたそうです。しかしドキュメンタリーの中で話された言葉は大変興味深く、そして凄く重いものを感じました。

「ワキ方に生まれ7歳で初舞台。ワキは面白くないと思っていたけれど、ある時ワキが観客を古の世界に誘う大事な役だと気が付いてから面白くなった。舞台に上がる人間は皆、知らない時代に行けるしね」

「ワキは不動の姿勢で、シテの引き立て役に徹して疲れるばかり。でもこういう家に生まれたから仕方ない。でも絶妙なタイミングでシテの演技を受けとめるのは良い緊張であり、大きな存在だと思う」

「宿命を受けとめることが能の伝承。習ったことを大事にして次の世代に繋げていくことです」

今や息子の欣哉さんは48歳、孫は17歳、11歳共に芸道に励まれていて、その言葉通りです。

宝生閑さんは現在、やはり私が舞台で見たように体調はすぐれないのは事実ですが、ワキの極意は「**耐えて、なぐさめる**」。「いくら苦しくても、求められる限り舞台を降りることはありません。苦しみに耐えて観客を慰め、同時に自分もまた観客に慰められなければやっていられませんよ」と(私のあの日の感想は優しくなかったと反省!)。そして「いつもこれが最後の舞台だと思って上がり、舞台で死んでもかまわない。いずれ寿命はあるのですから…」と続けられました。 痩せた体から発せられる言葉の気迫と覚悟に圧倒され、その生きざまに瞠目しました。

世阿弥は『風姿花伝』の中で、「老いた木にも花は残る」と言う例に自分の父親観阿弥を挙げ、晩年に舞った能は「いよいよ花が咲くように見えて、老骨に残る花」だと称賛しました(その時観阿弥 52歳!)。命に終わりはあっても能には終わりがないと説いた言葉にも老いこそ芸術の完成に近づき、老いてこそ表現できるものがあると老いを礼賛しています。私にはまだまだ理解が及ばないことが沢山ありますが、最近の宝生閑さんの様子は老いと芸について、深く考えるきっかけになりました。 尾崎純子記